

令和5年度第2回北海道地方競馬運営委員会議事録

〔 日時 令和6年2月14日(水) 13:30~15:30
場所 T K P札幌ビジネスセンター赤れんが前 〕

1 開会

(競馬事業室 木村参事)

2 あいさつ

(水戸部農政部長)

- ・ 令和5年度第2回北海道地方競馬運営委員会の開催に当たり一言御挨拶。
- ・ 平本委員長をはじめ委員の皆様方には、お忙しい中、御出席賜り感謝。
また、日頃からホッカイドウ競馬の運営に対して御協力と御理解を賜り、厚く御礼。
- ・ 昨年8月の運営委員会後に、人事異動により委員の改選があり、北海道新聞社の小林委員に新たに御就任いただいている。ホッカイドウ競馬の育成に向けて、御意見を賜るようお願い。
- ・ 昨年のホッカイドウ競馬は、コロナが2類から5類に移行して以降、様々なイベントも開催できるようになった。ファンの獲得に向けて、インターネット発売が9割を超える中、情報発信の仕方を工夫しながら取り組んできたところ。おかげさまで、発売額は512億円と4年連続で500億円を突破、確保することができた。
- ・ これもひとえに、関係者の皆様方のお力添えの賜物と考えており、この場をお借りして厚く御礼。
- ・ 本日の委員会では、令和5年度の競馬の開催結果と令和6年度の取組概要、また、門別競馬場の基幹施設の整備に向けた考え方等について御説明させていただく。
- ・ この施設整備については大変大きな事業であり、社会情勢上、事業費の高騰など、財源の確保が大きな課題となっている中、財源確保に直結する販売をどうしていくかについて、他主催者との競合などもある中で、色々と御意見を賜りたい。
- ・ 委員の皆様には、本日、忌憚のないご意見をいただきながら、今後の競馬運営について意見交換させていただきたいので、どうぞよろしくお願い致します。

3 議題

(1) 出席状況報告

(事務局 木村参事)

- ・ はじめに、昨年8月3日に競馬場で開催しました今年度の第1回運営委員会以降に、所属の人事異動に伴い、新たに運営委員にご就任いただきました委員をご紹介します。
- ・ 北海道新聞社の小林 基秀(こばやし もとひで) 委員です。

(小林委員)

- ・ 小林です。よろしくお願いいたします。昨年9月に編集局次長となり、この役を引き

受けさせていただいた。ホッカイドウ競馬はインターネットの普及とともに発展してきたと承知している。新聞社が逆にインターネットの普及とともに非常に厳しい状況だが、実は局次長の前にデジタルエディターという道新デジタルの編集長をやっていた。デジタルの良さを少しはわかっているつもり。少しでもお役に立てればと考えているのでよろしくお願いします。

(事務局 木村参事)

- ・ 続きまして、本日の委員の出席状況をご報告申し上げます。委員11名のうち8名のご出席いただいております。条例に定める過半数の出席を満たしておりますことから、本委員会は成立していることをご報告いたします。
- ・ なお、小椋委員、かとう委員、鳴海委員におかれましては、本日、都合により欠席されています。
- ・ 次に、お手元の資料の確認をいたします。
- ・ 配布資料は、次第、出席者名簿、配席図、資料1-1～1-3、資料2-1、資料2-2、資料3となります。ご確認いただき、不足の場合は事務局までお申し出ください。
- ・ なお、資料2-1、2-2については、新年度予算に関連することから、2/15の知事記者発表後の解禁となりますので、マスコミの皆様には、取扱いをご注意いただくようお願いします。
- ・ それでは、この後の議事の進行を平本委員長にお渡ししますので、よろしくお願いします。

(平本委員長)

- ・ 皆様こんにちは。よろしくお願いします。
- ・ 議題1について事務局から説明をお願いします。

(2) 令和5年度ホッカイドウ競馬開催結果について

- 競馬事業室 福士主幹より資料1-1～1-3を説明。

(平本委員長)

- ・ 只今のご説明の内容について、ご質問ご意見等があればお願いしたい。
- ・ 私は今まで長いこと運営委員をやっていて、今日初めて気づいたが、騎手の方が18名所属していて、1日12レースをやって、10頭立てとか12頭立てのレースがあるということは、騎手の方は1日何回騎乗するのか。

(山下委員)

- ・ 最多で11レースまで。8レース連続まで騎乗できるルールとなっている。

(平本委員長)

- ・ それは J R A や他の地方競馬でもそれほどたくさん 1 日に騎乗されるのか。

(木村参事)

- ・ 連続騎乗については、ホッカイドウ競馬では 8 レースまでだが、主催者ごとにルールが異なっている。

(平本委員長)

- ・ あの姿勢で 1600m とか 1800m を、時速 60 k m 近いスピードで、それを 1 日 8 回騎乗するのはすごいこと。

(山下委員)

- ・ J R A では土日で 12R すべて騎乗するジョッキーもいる。

(平本委員長)

- ・ 今まで騎手 18 人が多くないということは何度もお伺いしていて、騎手の確保が重要課題であることを聞いていたが、今日初めてかけ算してみたところ。

(石川委員)

- ・ 送迎バスの利用者数のデータについて、その中で、イベント実施日には南千歳にも寄っているということだが、南千歳駅からどれくらい乗っているのかというデータはあるか。

(事務局 福土主幹)

- ・ 本日はデータを用意していないが、利用者はそれほど多くないと聞いている。

(西村副委員長)

- ・ ホッカイドウ競馬は健闘していると思うが、全国の地方競馬の中ではこういった傾向か。

(事務局 木村参事)

- ・ 傾向としては、ばらつきはあるが、基本的には前年並みとなっているところが多い。一部、前年を下回っている主催者もいる。やはりコロナ禍での需要が一段落したことや、コロナが 5 類に移行したことによってレジャーが多様化し、旅行に出かけるなどの選択選択肢も増えた。コロナの時は競馬一極集中で楽しんでいただいていた方が、それ以外の選択肢も増えたので低下傾向にあると感じている。

(小林委員)

- ・ 売り上げが、発売額 500 億円はキープしたが、前年からは少し下がった。もちろん開

催日の関係もあるだろうが、先ほど申し上げたようにインターネットの普及で右肩上がりできていたのが、いつまでも右肩上がりという訳ではないだろうし、道庁の見方としては、もうすでにピークアウトしているのか、そうではないのか、どのような見通しかお聞きしたい。それによって設備投資の額、計画も変わってくると考える。どのような状況か。

(事務局 木村参事)

- ・ 今の状況は、確かに昨年と比べて総額で15億円下回っているものの、開催日数の影響もあるので、1日当たりの発売額をみると前年を上回っているのも、まだ引き続き維持できるのではないかと考えている。ただ、レジャーが多様化し選択肢が増えている中で、ネット発売が9割以上占めており、他の地方競馬主催者のネット発売の割合もコロナ禍を契機に上がっている中で、全国のお客さんがスマホで気軽にどこの競馬場を買おうかと選べる時代になっているので、ネットに注力していく。昨年、ユーチューブ番組専用のスタジオを競馬場内に作り、ユーチューブの配信をしたり、ネットユーザー向けに色々な取組を我々のほうから仕掛けて、発売向上に向けて取り組んでいるところ。基本的には、500億円以上が4年間連続で続いているので、自然体で1つの発売目標として500億円というラインを我々は目標としている。そういった中でいかに発売を落とさないかということで、更にネット発売に対しての取組の充実を図っていきたい。

(小林委員)

- ・ 当面の見通しとしては、右肩上がりではなく現状維持くらいのところを想定していて、事業計画としてもそのくらいを前提に設備投資を考えているということか。

(事務局 木村参事)

- ・ そのとおり。

(西村副委員長)

- ・ 令和5年度にナイトー競馬を始めた主催者が船橋など何件か増えたと思うが、これからナイトー競馬をはじめ、売れるということになると参加が競合する。そうすると、個性なのか特殊性なのか強さなのか、物もそうだが、売れるとなると同じことをやると思うが、その辺りの見通しはどうか。

(事務局 木村参事)

- ・ 西村委員がおっしゃられるとおり、今まで昼間開催だった主催者が、段々ナイトーに進出してきている。昔からナイトー開催をしている我々からすると、進出してきているという言い方になるが、段々発売が食われている。その傾向については、特に夕方18:30まで開催することを薄暮開催と言っているが、昨年は薄暮開催が増えている。今まで昼間開催しかしてこなかった浦和が薄暮開催に重点を置いてきており、他の競馬場もそう

いった方向に舵を切っている。今、競馬界の中で暑熱対策が言われているが、夏場の競馬開催は、府県では高温の中で開催しないといけない中、馬の福祉を考えると、昼よりも日が落ちた夕方や夜の開催、または昼間開催でも少し休み時間を取るなど、主催者は色々なことを考えてやってこられると思う。そういった意味でも、令和6年度については、さらなる競合が増えるので、我々からすると環境が厳しくなっている。競馬のレース内容、馬の頭数や質を高めて、皆さんに買って貰える番組を組んでいかないといけない。

(平本委員長)

- ・ 小林委員のご指摘、西村委員のご質問はホッカイドウ競馬にとって重要なことだと思う。今すぐ結論は出ないと思うが、そういう問題を抱えているということを通認識としておきたい。

(糸井委員)

- ・ 資料には載っていないが、今年度一番来場人数が多かったのはJBCの日だったと思うが、弊社も子供達を連れて競馬場に行ったが、車列が非常に長くできていた中、馬主席の駐車場は少し空いている状況だった。それに対して来年度どのような対策をしていくのか。コロナ禍が明けて入場規制がない状態の初めてのJBCだったと思うが、来年度はどのような目標でやるのか。正直なところ、もっとお客様が楽しめたり、軽種馬団体がPRできるようなブースを設置することによって楽しめるのではないのかと個人的に思ったので、そこについてどのようにお考えかお伺いしたい。

(事務局 木村参事)

- ・ 駐車場については糸井委員ご指摘のとおり、コロナ禍が明けて、入場規制のない中での初めてのJBCだった。それまでは入場規制をして入場者数を制限していたため車の台数を計算できた。今年度はフリー入場とし、今回は十分な体制を用意はしていたが、駐車場の場内整理について、効率的な車の回し方が出来ていなかった点が非常に反省すべき部分。令和6年度のJBCに向けては、場内整理に精通し、大規模イベントの経験がある業者と連携するなど、スムーズな入場を考えていきたい。また、駐車場でも来賓用、一般用と大まかなエリアを決めているが、状況を見て柔軟に対応していくことも必要と考えている。来場されて場内に入ってもらえる方についても、門別競馬場は他の競馬場と比べて入場人員のキャパシティが小さいので、そこはスペースの活用方法等を含めて、委員のご意見を参考に来年に向けて検討していきたい。

(中村委員)

- ・ 資料1-1の3ページで、きゅう務員の人数で外国人の記載があるが、インドの方が大変多いということと、中南米の方もいるとのことだが、この国籍に何か特徴があるのかということと、今後、外国人の方を受け入れていく具体的な方針があれば教えて欲しい

い。

(事務局 木村参事)

- ・ 外国人きゅう務員については、資料にあるとおり4か国の方々に来ていただいている。いずれも競馬のきゅう務員で来られる方については、動物の調教の資格を持っている。一般の技能労働という形での就労ではなく、技能を持って来る方で、母国でも何らかの形で競馬に携わっている経験のある方が来る。日高管内の特徴でもあるかと思うが、競馬場に限らず、浦河や新ひだか等でも軽種馬牧場にインド人のスタッフが数多く入ってきており、エージェントを通じて入ってくる。一番最初にホッカイドウ競馬に入ってきた外国人はインドの方。当初は1つのエージェントで平成30年に3人から始まったが、ここ5～6年の間に人数もエージェントの数も増えている。他の国についても同じくエージェントがいるが、そのエージェントの経営、紹介の中で受け入れている。今後においても、きゅう務員の全体数は、令和6年1月1日時点で前年に比べて若干増えているが、これは外国人を含めた数であり、日本人のきゅう務員の絶対数が少ない。外国人に来ていただかないと、競馬開催に支障を来す状況なので、今後も一定程度外国人のきゅう務員に頼っていく部分は正直ある。

(中村委員)

- ・ 競馬のきゅう務員にインドの方が多く、日高地区にいらっしゃる外国人でインドの方の割合が高いということですね。ありがとうございます。

(3) 令和6年度ホッカイドウ競馬の取組概要案について

- 競馬事業室 福土主幹より資料2-1、2-2を説明。

(小林委員)

- ・ 発売目標額が480億円と低く、そもそも令和5年度の計画額は458億円とずっと低かった。先ほどのお話で見通しが500億円以上を維持していきたくという見通しの中、目標額が低めに設定されるのは、何か歴史的背景なり事情があるのか。

(事務局 木村参事)

- ・ 歴史的背景は影響しているが、過去に平成4年から20年間ずっと赤字経営できており、その中で最大の赤字幅は単年度で28億円だった。その前まではバブル期で非常に好調な時期が続いており、バブルの崩壊とともに、右肩下がりとなった。その反省も踏まえて、収入、歳入は固めに、なおかつ支出の部分も歳入に見合った額を考えている。先ほど500億円を1つの目安にしていると申し上げたが、これは実績ベースの見立てであり、あくまで予算上は固め固めにみて、不測の事態に少しでも備えることができるようにと考えている。

(小林委員)

- ・ その分支出も固めにみるという意味では理解できるが、民間企業だと次期予想など色々な計算をしてなるべく実態に近いものにするし、個人企業であれば、高めの目標を出して社を挙げてみんなで一丸となってやっていくということがあがるが、意地悪な見方をすると、最終的な決算が出た時に、計画比よりは良かった、プラスだったとなるようにしているのかと疑ってしまったのでお聞きした。あくまでも支出を固めにみるためにということであれば多少は理解できる。

(事務局 安田室長)

- ・ 支出は、かかる経費は払っていかないといけないので、必要なものは積んでいくが、何かあったときに皆さんに迷惑をかけることになるので圧縮していく。しかし、収入については過去の経験を踏まえながら、固めに積んでいくこととしており、我々としては、発売額が500億円を超えても、予算は固めに、過去の轍を踏まないように考えている。

(山下委員)

- ・ 新年度の番組の充実について、昨年5月に新種牡馬限定のフレッシュチャレンジのレースを実施して概ね好評だったと思うが、こちらは次年度も設定する予定か。

(事務局 木村参事)

- ・ 昨年初めて実施させていただき、次年度も実施していきたいと考えている。昨年8月の第1回の委員会で西村委員からも御指摘があったが、打ち出し方も含めて検討したい。

(山下委員)

- ・ 人の充実という点で1つ提案をさせていただきたいが、ジョッキーや厩務員の確保という点では必要な方向に対応をされるということを伺ったが、もう1点要望させていただきたいのが、門別競馬場の運営をされている振興公社の職員の確保面についてももう少し目を向けていただきたい。今年度も採用活動をされていて、前年と比べて1か月採用活動を早めたと思うが、告知の手段として公式ホームページのみであったり、地全協のホームページだけでは、優秀な学生さんなり、競馬場で働きたい人を拾い上げるのはいささき厳しいのではないかと。周知活動に費用はかかると思うが、もちろんジョッキーなりきゅう務員といったプレイヤーの確保も重要だが、競馬場を運営していくサイドの人材確保についてももう少し目を向けていただきたいということを提案させていただきたい。

(北海道軽種馬振興公社 濱田事務局長)

- ・ 公社の人材について、年齢がいびつになっており、ここ数年で退職者が数人規模で出るという状況となっている。そのような中で、新規の職員採用も進めているが、限られた人数しか来ない。新年度4月には2名採用する方向で進めているがそれでもまだ足

りない状況。御指摘のあった募集の仕方について、私どものホームページ、ハローワーク、地全協のホームページに載せている。昨年、私も酪農学園大学や静内農業高校にも直接行ってお願いした経過はあるが、まだまだ不十分かと思っている。現在、人材募集会社と打合せを行っており、できれば早い時期に活用して募集を進めたいと思っている。

(浜近会員)

- ・ 馬の遠征のことについて、ホッカイドウ競馬から他場に出て行くのは活発だが、逆に門別に来てくれる馬が圧倒的に少ない。JBCも4年経って、相変わらずJRAからは来るが他場からは来ない。その対策は何か考えているか。

(事務局 木村参事)

- ・ 門別競馬場の重賞競走はほとんど交流競走として地方からの参戦の門戸を開いているが、やはり特に2歳馬や牝馬については門別の馬が強いという評判もあり、なかなかこちらに遠征して勝ちを取りに来る馬は少ない。こうした状況も踏まえて、先ほど暑熱対策の話もあったが、向こうで暑い時期に走る代わりに涼しい北海道で交流競走に来ませんかといった構想を持っている。相手の馬主さんの考えもありませんか実現していない。実際、賞金等もここ数年増額しており、出走手当も増額し、各種奨励金も手当をしているが、なかなか来てもらえないのが現状。

(事務局 安田室長)

- ・ この課題については、全国的な課題にもなっていて、地全協の中でも議論になっている。北海道だけでなく他の主催者でもそういう課題がある。もっと地方として交流させていけないといけない。JRAに対抗できる強い馬づくりをしていこうという話もある。JRAとの交流競走で、地方馬の最先着馬に5着でもお金を出すなどの手当もしてくれているが、そういった様々な対策を打って、全国で各主催者がJRAと地方が交流できるような面白い魅力ある番組作りをしようとして取り組んでおり、引き続き全国の中で検討していきたい。

(浜近委員)

- ・ 開幕週にネクストスター北日本が組まれているが、岩手から来てくれそうか。

(事務局 安田室長)

- ・ 蓋を開けてみないと分からない。

(浜近委員)

- ・ これでホッカイドウ競馬だけとなると、本当に何か対策を考えないといけないのではないか。

(山下委員)

- ・ ネクストスター北日本は、兵庫チャンピオンシップにつながるレースかと思うが、ネクストスターが4月18日で、兵庫チャンピオンシップが4月29日ということで、日程的になかなか遠征にはつながってこないのではないかと。勿論体系を整備した初年度ということなので、次年度以降の課題になってくると思うが、その辺りの日程については再考の余地があるのではないかと、日程を見せていただいて思ったところ。

(浜近委員)

- ・ 去年は、砂の入れ替えで開幕を1週間遅らせたが、今年も同じ時期のスタートとというのはどういった理由か。

(福土主幹)

- ・ JRAのIPAT発売の関係や、春先、色々対策は打ってはきているが、馬が確実に確保できるのかといったこともあるので、総合的に勘案して、R5と同じようなスタートになるが、R4と比べると1週ほど遅い時期のスタートとした。

(浜近委員)

- ・ 兵庫チャンピオンシップまで、ほぼ連闘で走らないといけないのでかなりきつい。そこにつながるレースにはならないのではないかと。向こうが動かないのであれば、こちらが早めるしかない。持ち回りで来年は岩手での開催になるが。

(西村副委員長)

- ・ 競馬は、強いスター的な馬を出さないとだめ。イグナイターが今度フェブラリーステークスに出るが、今は園田所属だが、その前は中央で1勝馬だった。1勝馬が地方へ降りて黒船賞を取り、この前のJBCを取って活躍しており、それをファンが追っているが、やはり強くないと駄目。知り合いが馬主なのだが、あの方は多分中央様式の調教をしているはず。調整の部分で園田にというのもありだが、北海道の場合は、そのようなことをしなくても、自分で中央並みの調教施設を持っている。来てくれないということもあるが、それなら出て行って勝ち取って、強い馬が北海道にいるということで、ファンを呼び込むとか馬券を売るといった手法しか今はないのではないかと。それが道営の一番の魅力だと思う。浜近さんが言われたように、遠征しても今のような苦しいローテーションではなくて、勝ち取っていけるようなローテーションとなるような開催日程を組んで、北海道の馬が強いということを知ってもらいファンを呼び込むことが、一番北海道にできることかなと思う。

(糸井委員)

- ・ スターになる馬が必要だということで競走馬の話だったが、夏の委員会でもお話しし

たが、メジロゴゼンという誘導馬がいて、現在、新ひだか町のライディングヒルズ静内に移動しているが、シーズンが終わって戻ってきた時に、鞍を置く部分の下の「き甲」という背中の部分の鞍傷（あんしょう）が酷すぎて、しばらく乗れない状況だった。その状況は騎乗者の公社には伝えていたが、常歩（なみあし）だけだから何とか乗って欲しいと言われていたが、結局戻ってきてしばらく使えないという状況になった。ライディングヒルズ静内とは委託で一緒に仕事している関係で、困ったということだけは伺っていた。勿論誘導馬だからいないと困るということは分かるが、例えば、ライディングヒルズ静内には他にも馬がいるので、メジロゴゼンに限らず、持ち回りにするとか。メジロゴゼン自体が体力が大分落ちている。誘導小屋でも蹴ってすごくうるさくて、調教師さんも皆さん見に来るような状況が結構多かった。騎乗者もすごく苦勞していた。誘導馬はただ常歩（なみあし）して歩けばいい訳ではなく、ファンに愛される馬というところでは、馬をちゃんと見て欲しい。以前、ポニーがいたが砂場があるが、そこに馬のおもちゃを置いてそれで終わりではなく、やはりお客さんに少しでも馬と触れ合ってもらえるように、毎回でなくても良いが、子供たちが家族連れで来たときに、馬と触れ合えるような場所がないと駄目ではないかと思った。

（事務局 安田室長）

- ・ ご指摘のとおり、誘導馬はファンにとっても大事なパーツの1つであると我々も思っている。自分が公社にいた時にはポニー小屋に小さなポニーが1頭いて、子供たちに親しんでいただいた記憶がある。競馬場としてはそうした触れ合い機能は大事だと思っている。そうしたことをしっかり受け止めながら競馬場として運営していく必要があると考えている。ご意見ありがとうございます。

（石川委員）

- ・ 競馬とあまり接したことのない方、これから競馬に来て欲しい方への間口をどう広げていくかという視点でいくつかお話させていただきたい。1つはSNSの活用ということで、LINEを使ってということで、これは大変良いなというふうに思う。あともう一つ、最近色々なところから漏れ聞くところでは、やはり若年層、20代、30代への波及という意味でいくとインスタグラムが何より強いということを知る。インスタグラムを使えないか。インスタの良いところは、ビジュアル重視なので、難しい文章が要らず、写真を撮って出しなところ。やはり馬とか、グルメとか、美しい環境とかビジュアル的なコンテンツをたくさんお持ちなので、そういったものを撮って紹介するだけでもずいぶん違うのではないかと思う。ちなみに、ホッカイドウの競馬関係でインスタのアカウントを持っている方を調べたが、うらかわ優駿ビレッジ AERUさんが持っていて2万2千人のフォロワーがいる。難しいことを発信している訳ではなく、ひたすら馬の写真を発信している。多分、ビジュアルで惹きつけられる人はこれでいいのではないか。そういう意味で今後使えるのではないかと思っている。2つめは新千歳空港をうまく使えないのかということ。先ほど南千歳からはあまりバスの乗降者がいないということだった

が、空港会社とのやりとりもあると思うが、新千歳空港を經由できないのかと思っている。例えば、向こうから来る競馬ファンの方にも便利だと思う。午後に着いて新千歳空港からバスに乗って競馬場に来て、夜はそれに乗って札幌まで帰って来られるとなるとすごく便利。新千歳にバスを回すとか、あるいはイベントなり広告をやって空港の方々の目に触れるところにアピールできないかということも思った。3つめは、これは先の話だが、アポイ岳の辺りが国立公園に格上げされる中、国立公園目当てに旅行商品が必ずできるはずなので、その中で、せっかく地元なので、馬の産地としてアポイ岳の国立公園と一緒に売り出す、PRするというような方向も考えられるのではないかと。

(事務局 木村参事)

- ・ 御意見に感謝。インスタグラムの投稿について、ネット発売が9割以上を占めている中で、いかに門別競馬場に魅力を感じてもらい知ってもらうか、競馬ファンを取り込むことについて、軽種馬振興公社と今後検討して考えていきたい。
- ・ バスの経路等についても、なかなか通常期は平均で37名の乗車人数であることを報告したが、大きなJBC競走やブリーダーズゴールドカップなど皆様に注目されるレースのある日は、千歳空港経由若しくは千歳空港からのバスを運行している。お客さんが気軽に競馬場に来ていただけるようにするには、どのようなアクセスができるのかも含めて、今後考えていきたい。
- ・ アポイ岳国立公園の関係は、観光との連携について、日高振興局とも過去から連携して考えてはきているが、宿泊施設や行程の問題もあり、なかなか競馬場を利用した観光というのは正直言って実現できていない。次の議題で御説明する競馬場の再編整備を契機に、競馬場も新しく生まれ変わるので、観光との連携についても考えていきたいと思っている。

(山下委員)

- ・ 石川委員から発言のあったインスタグラムについては、昨年、門別競馬場のフォトコンテストを開催して、インスタグラム広告も展開されていたと思うが、現在どのくらいの投稿数があって、なにがしかの効果測定などの振り返りはあるか。

(石川委員)

- ・ 確認したが、投稿数は3だった。

(山下委員)

- ・ もう少し多かったとは思うが。フォトコンテストは春・夏・秋とあって、それぞれのシーズンごとに優秀作品を選定するなどされていたが、効果測定とか、実際の結果をどう捉えているのか御意見があればお願いしたい。

(事務局 藤原主査)

- ・ 山下委員がおっしゃるとおり、インスタグラムの機能について、広報とも相談していたが、本来であればフォトコンテストに投稿していただいたものをインスタに入れることができればよかったが、去年は出来ず、現在掲載されているのは、公社で投稿したものだけが載っている。来年度に向けては、皆様おっしゃるとおり、投稿いただいた写真がインスタに載るよう検討している。例年はインスタグラムを活用した中で実施したいと考えている。

(平本委員長)

- ・ SNSが若い人たちに対する一番の強みで、特にインスタグラムが効果があるということなので、是非改良・改善が行われると良い。

(4) 門別競馬場の基幹施設整備に向けて

- 競馬事業室 福土主幹より資料3を説明。

(西村副委員長)

- ・ 先ほど石川さんが発言されたことと同じようなことになるが、昨年暮れに、日高管内の商工婦人部に卓話を頼まれて1時間ほど話をした。その際に何を話したかということ、これから道営競馬が変わり、リゾート的な競馬場になる中、門別競馬場を核とした国立公園も含めた日高管内のリゾート的な観光地についてお話した。商工の人達がどう考えるのかということについて、「ラピダスが来て人が沢山増える時に、その人達が休暇をどう過ごされるのか、どのように地域に呼び込むのか考えて下さい」ということ、もう一つは、「生産者は芸能人も含めて色々な産業の人達や馬主さん達が知っていて、色々な形で協力してもらおうが、軽種馬の牧場からは絶対にそういった情報は発信しないので、やはり地元の商工の関係者がどういうアイデアで呼びかけることが必要である」ということをお伝えした。最後に婦人部長が私のところに来て、「そう思っていたが、手法がわからない」ということだった。先ほど石川さんが言われたように、振興局にも商工の担当があると思うが、上手く連携して、競馬場としてもタイアップして、地域産業をどう盛り上げていくかの中に競馬場も入ることが必要かと思う。日高の馬産地の中で、海の物もダメになっている中で、どうやって商人として、商業者として町を作っていくかというときに、競馬場の役割がそこにも出てくるのではないか。要望になるが、なんとかそういったことについても関わっていただきたい。
- ・ もう1つは質問になるが、暮れに農水省からアンケートが来て、アニマルウェルフェア、ストレスのない動物の飼い方に馬も出てきたが、暑さ対策について、国際的な流れが出てきている中で、今回の厩舎整備で暑さ対策を組み入れるのか。

(事務局 木村参事)

- ・ 動物福祉への対応について、現在計画している競馬場の厩舎整備については、暑熱対策に特化した対応は予定していない。府県で開催されている他主催者の競馬場では、下

見所にミストをつけるなどの対応をされているが、今現在、北海道で開催する際にはそこまでの対応は必要ないと考えており、現時点では考えていない。今後温暖化・沸騰化が一層進展していくことになれば、当然そういった機器・設備を追加していくことも考えていかなければならないと考えており、今後の推移をみて対応を考えていきたい。

(西村副委員長)

- ・ 自分は牧場をやっていることもあるので、皆さんに情報提供させていただく。先ほどインド人の話が出たが、平成 30 年にギリというインド人エージェントが入ってきて、そのときから関わっており、現在うちには 4 人のインド人厩務員がいる。給料は、普通の牧場管理でだいたい 19 万円から 20 万円。インドには競馬場はあるが、ライセンスの証明書を貰ってきて日本に入国することになるが、見ているとみんなドバイでの出稼ぎでの経験値が多い。だいたい 20 万円のうち生活費は 4 万円程度。ヒンドゥーとイスラムが中心と思うが、食べ物にほとんどお金をかけず、残りの 15 万円くらいは国に送っている。今、少し円安になっているが、当時は国では 5 倍くらいになり、家族よりも一族の面倒を見ることができるくらいの金額。バカンスと称して 1 年に 1 か月くらい国に戻っているというのが現状。エージェントについては、今は、ギリには管理料として 3 万円を別に払っており、総額で 23 万円払っている。それにダンピングするエージェントが出てきて、2 万円や 1 万 5 千円でいいよというエージェントもいる。平成の当時は、取り合いになって、本州のほうで牧場同士で揉め、けんかになったこともあった。名古屋も外国人きゅう務員を使っているが、今はエージェントが増えたことと、入国要件が緩和されたことで、結構人は入ってきている。道営でこの間、6~8 人いなくなったが、キャッチボールをするエージェントが出てきた。入国の手続きを取ってきた人を、日本国内でキャッチボールして、エージェントを自分の所属にする。浦河のサムは 200 人以上抱え、ギリも 200 人以上抱えているが、かけ算なのでその 2 倍、3 倍が月に入ってくるお金となる。そういうビジネスになっている。産地としてはそういう人がいないと間違えなく困る。燃料などライフライン部分は牧場持ちで、1 人 26 万円くらいになる。道営の調教師に聞いたところ、日本人スタッフの時は成績が上がらなかったが、厩務員を全てインド人にしたらベスト 10 に入った。今、日本人の技術者は、社台やノーザンなどの大手育成場で給料の高いところにはいるが、人材が少ないため、どうしても北海道の場合はインドの人に頼らざるを得ない。昔は日高地方には、トマトとピーマン農家にベトナムやミャンマーから来ていたが、日本企業が現地に工場を作り始めてあまり来なくなった。インドは人口が多いので、まだ人は来るが、色々な状況の人がいるので、いい人だけをチェンジしていく。
- ・ うちの J A しずない管轄で、馬の管理をやっていて労災にかかったのは、J A しずないだけで昨年 65 件発生しており、すべて牧場で発生。先日ベトナムの方がむかわの上水牧場でもあったが、育成場では、驚いたとか振り落とされたとかで頻繁に起こっている。B T C ではもっと発生しているのではないか。ほとんどが育成場で、繁殖の生産活動ではあまりない。

- ・ 自分は北海道馬主会から、日馬振の全国の地方競馬の公正委員として出向いている。公正競馬を確保するために園田競馬場が強く出してきたのが、美意識的プロジェクト。きゅう務員の服装をきちんとしよう、身なりからきちんとしようということで、そこにフォトコンテストも入っている。門別競馬場で季節ごとにコンテストをやっていることを知らなかった。全国ネットでリアルタイムで映し出されているので、身なりからきちんとしようという活動を全国の馬主会では行っていて、地全協からもお金が出て表彰しようというところまでいっている。道営競馬も北海道記者クラブが表彰しているが、そういったこともやっているということも知っていただければと思う。

(平本委員長)

- ・ 園田の場合は、主催者からきゅう務員の服を支給しているのか。

(西村副委員長)

- ・ 主催者側から支給されている。重賞競走ではスーツを着用するなど意識を変え、長靴は止めようとか、それぞれ工夫されている。

(糸井委員)

- ・ 質問だが、以前の夏の資料では、業務エリアの横に馬との触れあい施設があったが、今回の資料で欠けているのか、なくなったのかどちらかなのかお伺いしたい。施設を作って、誘導馬を置いて、お客さんが競馬のみならず馬を楽しめて、地元の子供達もそこで馬を学べるといった流れだったと思うが、なくなったのか。

(事務局 木村参事)

- ・ 今回の資料は、道として整備していく部分を記載した。馬との触れ合いエリアは構想として持っており、地域と連携した取組の中で実現していきたいと考えている。資料の表示にはないが、考えがなくなったということはない。

(中村委員)

- ・ 今の糸井さんの話にも繋がるかもしれないが、先ほど観光との連携という話も出ていたので、観光の立場からお話させていただくと、もちろん基幹施設の整備は競馬ファンのためということではあると思うが、観光客とか地域とか色々な人達にも楽しんでいただけるような施設を目指す、観光施設として楽しんでいただけるようなことを考えると、馬のもつ本質的な魅力をしっかり理解するとか、あるいは先ほどアポイ岳の話もあったが、自然とのコラボレーションでどんな価値を創造できるとか、馬との触れ合い施設もそうだが、競馬という1つの目的だけでなく、もう少し広いイメージをもって取り組むと観光との連携が広がってくるのではないかと。他の地域では、ホースセラピーに取り組んでいるところもあると聞いており、子供達が馬と触れ合えるような機会をつくっていただいているということで、そういうところで馬を大好きになってもらえると、間接的

ではあるが、観光とか地域とか色々なところにつながっていくのではないか。

(平本委員長)

- ・ この間、ばんえい競馬を初めて見に行ってきた。ちょっとした博物館があったり、地域の野菜を売っている市場のような場所があったり、馬券を買わなくても楽しめるようになっていた。裏側には馬ににんじんをあげるスペースもあった。今、中村さんがおっしゃったことは、競馬場をまさに観光施設として、日高の門別エリアの核として、石川さんも同じようなことをおっしゃったが、そういうような考え方で整備計画を捉えていくと、長い目でみていくと道営でやっている意味がより一層出てくるのではないかと思う。様々な費用が高騰している中で、新しいことを組み込むことの難しさはとてよくわかるが、何か日高の地域の1つの観光の目玉になるようなものとして再編整備が行われればよいと私も思う。
- ・ 数字が今回出ていないので、なかなか具体的な話がしづらいが、今申し上げたとおり建設費が非常に高騰している中で、できるだけコストを抑えながら、段階的にきゅう舎エリアや住居エリアは競馬を持続的にやっていくために必要なインフラなので、もちろん業務・来場者エリアも重要だが、なんといっても馬をきちんとメンテナンスしてそこに関わる人がそこで生活することを考えた時に、クオリティが低いと最終的にはいい人が集まらず、良い馬の調教もできずということになるので、こういうところもきちんと整備していくことが重要であると思う。

(5) その他

(平本委員長)

- ・ 最後の議題その他について、事務局として特段の議題は用意していないが、この際なので地方競馬やホッカイドウ競馬に対するお考えなどあれば、お願いしたい。

(平本委員長)

- ・ 私から、1つだけ。今日の1つめの議題と関連するが、売上高 500 億円ということで、ずっと販売額を見ているが、収益性を見たときにどうなるのか。ネットは沢山売れているが、手数料も沢山払っている。一方で、A i b a や本場では手数料がかからない馬券を売ることが出来る。例えばだが、100%販売がネット発売になった時に、手数料をどれだけ払って、そのときのコストがどうなるか。仮に本場で売らなくなった時にその時のコストどれくらい減るのか。収益構造を考えた時に、100%ネット販売にすることはホッカイドウ競馬にとって可能なのか。これはあり得ない想定ではあるが、どんどんネットの販売比率が高まっていくとするならば、そういう極端なシチュエーションを考えて、実は1枚の馬券を売る時の1枚当たりの利益は確かにA i b aの方が高いが、A i b aを維持するコストを考えると高くないといったことがあるかもしれない。それであれば、早くネットに100%舵を切ったほうが良いのではということもある。実際にはそういう構造になっていないと想像するが、中長期的なスタンスで考えた時に、

どこで利益を生んでいるのか、何がコストになっているのか、単純な売上だけでない収益構造を、過去に委員会で見せていただいたこともあったが、そういったものをベースにした上で、中長期的な事業計画を考えていく必要がある。冒頭に小林委員がおっしゃったようにそういった事業計画に基づいて投資も行われる訳なので、単純な 500 億円台を維持するという話だけでもないのだろうと考える。機会があれば、この運営委員会で議論できればと考えている。

(事務局 安田室長)

- ・ 次回の運営委員会でどこまで出せるのかは、これから内部で検討するが、収益構造を考えた時に、ホッカイドウ競馬の開催は年間八十数日で、1年の 2/3 がクローズしており、その期間にどうやって収益を生むのかというところで、我々としては、場外発売所で、冬場に「アルバイト」と言っているが、他の地方競馬や J R A の発売が我々の収益構造を高めている。百数十日間競馬ができればネットにシフトできるが、冬場を抱えている北海道の特殊性をどう乗り切るかについて、次回どこまで出せるかはわからないが、収益構造を検討したい。

(平本委員長)

- ・ ありがとうございます。ちなみに冬場にレースをすることは難しいか。

(事務局 安田室長)

- ・ 昔、門別競馬場は雪が少ないということで、正月競馬を行っていたが、凍結するため馬のケガなどの危険がある。滑ることもあり、それを防止するための養生する経費を考えると、なかなかコストが厳しい。

(小林委員)

- ・ 平本委員長の続きだが、累積赤字があって、今は返済モードに入っている。ただ、どこかで売上がピークアウトするだろうし、委員長おっしゃったように収益構造があり、そこから借金の返済あるわけなので、その辺は一度推移を見たいので是非お願いしたい。

(平本委員長)

- ・ 見せていただける範囲で構わないがお願いしたい。そういったことは、議論の上では重要な基礎的な前提になる。

【まとめ】

(平本委員長)

- ・ 本日の3つの議題について、議題1のホッカイドウ競馬の開催結果については、小林委員がおっしゃってくださったとおりで、今後の事業計画を考える上で今後どうみて

いくのか。あるいは特に薄暮レースなどが他場で開催されることによる競合をどのように見ていくのかというのが今後の問題として出てくるであろうということであった。それから議題2のホッカイドウ競馬の取組概要案については、例えば北海道から他場に行く馬がいるが、他場から北海道に来る馬が少ないといった非対称性を解消できないか、ただなかなか難しいのではないかといった御議論、あるいは、SNS、特にインスタグラムの影響力をもう少し活用してはどうか、新千歳空港の活用やアポイ岳の国立公園化を契機とした日高エリアにおける競馬場の位置付けを考えるといいのではないかといった御意見、また最後のところについては、これも同じだが、門別競馬場を核としたリゾート化や観光施設としての門別を考えると同時に、外国人の問題については、西村副委員長から沢山情報を御提供いただいた。

- ・ それから、議題の2で、人の充実という点で、振興公社の人材確保も持続的な競馬運営を考えることについて重要であり、そういったことについても御検討いただきたいといった意見も出された。
- ・ 以上のような議論が今日の運営委員会で出された主な意見だが、このようなことを踏まえて、新年度2024年度の競馬事業がよりよくなっていくといいなと我々も思っている。
- ・ 現委員の任期が残り1年弱となり、その後のことはまだ分からないが、少なくとも夏にもう1回委員会で御一緒できる。令和6年度の第1回の運営委員会まではこのメンバーで開催できると思うので、次回は恐らく門別での開催になるかと思うが、また色々な御議論をいただければと思う。それでは事務局に進行をお返しする。

(事務局 木村参事)

- ・ 本日は、貴重な御意見に感謝。
- ・ 閉会に当たり、水戸部農政部長より一言御挨拶。

(水戸部部長)

- ・ 本日は、色々貴重な御意見を賜り感謝。しっかり受け止めさせていただき、必要な検討も含めて対応させていただく。
- ・ また、平本委員長には、円滑な議事進行誠に感謝。
- ・ 今年のホッカイドウ競馬は、2か月後の4月17日に開幕を迎えるが、良いスタートが切れるよう、私どもスタッフ一同、しっかりと準備を進めてまいりますのでよろしくお願い致します。
- ・ 本日は誠にありがとうございました。

(以上)